

【解答例】

- (I) 奈良時代の中ごろから、日本の神々が仏教による救済を求めているという考えや、神々は仏教を守る存在だと考える神仏習合思想があらわれ、神社内への神宮寺の建立や神前読経のほか、神に仏号をつけたり、寺院に鎮守神を勧請したりするようになった。やがて、神仏習合思想が浸透して神仏が同一視されるようになると、元来神祇信仰では存在しなかった神像も制作されるようになり、神は仏が仮の姿でこの世に現れた存在だとする本地垂迹説の成立に繋がった。(210 字)
- (II) 承久の乱後、幕府は後鳥羽ら三上皇を配流、仲恭天皇を廃位とし、幕府が支持する後堀河天皇を即位させ、朝廷を含めた西国を監視する六波羅探題を置いた。畿内や西国に広がっていた上皇方の所領を没収し、恩賞として御家人に地頭職を与えた。こうして、幕府が皇位継承や朝政に干渉するようになったことで、それまでの畿内・西国を中心に支配する朝廷と東国を中心に支配する幕府という二元支配体制が変化し、幕府が優位に立ってその支配を全国に広げた。(209 字)
- (III) 飢饉で人口減少の著しかった陸奥や北関東などで百姓の他国への出稼ぎを制限し、代官の交代や荒地復旧のための公金貸付を行った。飢饉に備えて、社倉・義倉に身分に応じて米穀を備蓄させ、諸藩に1万石につき50石の囲米を命じた。天明の飢饉で頻発した打ちこわし対策も兼ねて、農村から江戸に流入したが正業を持たず帰村を希望する者には、旧里帰農令で必要な資金を援助して帰村を奨励し、希望しない者や貧民には治安の安定も目的に人足寄場を設置した。(210 字)
- (IV) 第一議会では、民党が「政費節減・民力休養」をスローガンに地租軽減を求めて第1次山県内閣と対立した。その後も初期議会では、地租軽減を求める民党と軍拡予算を求める藩閥政府の対立が続いた。日清戦争後、藩閥政府と政党の妥協が行われたが、第3次伊藤博文内閣での地租増徴案は自由党・進歩党の反対で否決された。その後、第2次山県内閣で列強の中国分割やロシアの南下を背景に旧自由党系の憲政党と提携し、地租増徴を実現した。(202 字)